「たばこ戦争」で孤立深めた厚労省

同時改定に響く自民党族議員との隙間風

参議院議員政策担当秘書　岡田裕二

「大臣が反省しないと、法案ができるわけがない。どういう風に反省するのか。今日までのところでは、まったく反省の気配がない」

17年5月30日に開催された「自民党たばこ議員連盟」。受動喫煙防止法案を巡る塩崎恭久厚生労働相の強硬姿勢について、野田毅会長が苦々しく吐き捨てるようにこう言うと、会場内からは「そうだ、そうだ」と呼応する声が相次ぐ。

鈴木俊一・自民党たばこ特別委員会委員長が「党内の禁煙派、分煙派両者の仲立ちに政調が入り、壮絶な苦労の結果、ひとつのまとめができた。しかし大臣のせいですべて頓挫した」と報告すると、岩屋毅・カジノ議連幹事長も「推進派、反対派双方の幹部の先生方の努力に敬意を表する。そのうえで、何がいけないと言っているのか！大臣よ！　物事をまとめる気がないのか！」と、廊下にまで響き渡る大声で批判。結局、双方の溝は埋まることのないまま、法案も提出されずに通常国会は幕を閉じた。

すでに尾辻秀久・超党派禁煙議連会長、山東昭子・自民党禁煙議連会長、古川俊治・自民党禁煙議連事務局長ら禁煙派の領袖は、法案上の「原則屋内禁煙」という文言を放棄する代わりに、一定規模以上の全公共施設の禁煙を実現するという、名を捨て、実を取る作戦で意思統一をしていた。反対派、すなわち分煙派も、「望まない受動喫煙は防止する」というスローガンの下、一定規模以上の全公共施設内禁煙について譲歩していた。

茂木敏充・自民党政調会長も、両者の歩み寄り具合を見ながら、後は「一定規模」の線引きだけが問題として残っているのみと認識。調整に自信を見せ、5月8日には「今国会に法案を提出する」と明言した。法案の生殺与奪について全権を持つ政調会長が太鼓判を押したのだから、多くの禁煙派は、ようやく待ち望んだ第一歩が踏み出されたのだと歓喜した。

茂木、田村、野田との確執

しかし塩崎厚労相は、そもそもの「一定規模」の考え方に反発。国内のあらゆる施設内の禁煙がなされなければ法案提出の意義はないとして、禁煙派、分煙派、党政調の三者合意を一蹴。安倍晋三首相も塩崎厚労相をかばうがごとく、5月25日に茂木政調会長に対し、通常国会内での法案提出を厳命。茂木氏は一転して窮地に追い込まれることになった。

政調会長として、法案を出すと自ら明言したにもかかわらず、調整失敗により法案が出せないことになれば、責任問題になりかねない。党内随一の政策通として知られ、計画は100％実現する超実務派としても知られる茂木氏にとって、それは耐えがたい屈辱だった。まして、厚労省のために分煙派から譲歩を引き出したのは自分だという自負もあるため、裏切られた悔しさと「厚労省憎し」の念だけが積もった。

また、今回の「たばこ戦争」で茂木氏と同等以上の傷を負ったのは田村憲久政調会長代理だ。上司の茂木政調会長の命で調整の役を任されたために、禁煙派でありながら、メディアでは自民党側の代表として、分煙派の筆頭のような扱いを受けた。国民を煙から救うヒーロー、塩崎厚労相に対し、それに抵抗する利権まみれの「自民党・田村」という構図で叩かれ、政治家としてのイメージも大きく毀損された。

3月に、厚労省が法案の草案第2弾を発表した際も、厚労省は事前に党側には根回しをせず、先にマスコミに一斉に流した。多くの党幹部は厚労省案を新聞報道で知ることになり、党内の批判の矛先は窓口の立場の田村氏に集中した。

5月の禁煙派・分煙派双方の合意形成に際し、厚労記者会を中心に合意内容をリークしたうえで、それを批判するよう厚労省がけしかけていることを知ったときの田村氏のショックも大きかった。「ここまでやるか」との思いを、古巣である厚労省に対して抱いたのは想像に難くない。

厚労省は野田氏に喰らいつくことも忘れない。

「対策が不十分な緩い案。歩み寄りは考えられない」

3月7日夜、突如記者会見を開いた健康局の正林督章健康課長は、野田氏らが掲げたたばこ議連の法案について徹底的に腐したうえで、与党との妥協を拒絶する異例の声明を出した。

たかだか一課長の分際で、当選15回を数え、自治相や建設相などを歴任した自民党の超大物が出した案を、未熟なものと一蹴したのだ。まさに前代未聞のことだ。

これも、10年にひとりの逸材として出世が期待されながらも、塩崎厚労相と政策的に対立したばかりに局長止まりでキャリアを閉ざされ、ついには遠くアゼルバイジャンまで飛ばされた前雇用均等・児童家庭局長の香取照幸氏の背中を見てのことだろう。しかし、一連の厚労省の挙動により、政調幹部・厚労族と、厚労省との間に埋め難い溝が生じてしまった。

譲らない塩崎厚労相（左）

「決められない政治」の再来

禁煙政策が前進することを望む国民と禁煙派、都議選の対立軸に受動喫煙対策が取り上げられるなか、何らかの成果を残したい自民党、そして大幅な妥協を示した分煙派。三者すべてに「一両損」のダメージを残し、さらには厚労省と厚労族の溝を深め、厚労省への憎悪のみを募る結果に終わったたばこ戦争。

今回の顛末を顧みるに、民主党政権時代を思い出した。なぜならば、民主党政権こそ「決められない政治」の典型例だったからだ。

民主党の国会議員一人ひとりは、勉強熱心な議員が多く、議論を厭わない真面目な人が多かった。そのため、自らの主張の正しさに固執する余り、妥協点を見出せない人も多かった。彼らからすれば、自らの主張の実現が国民の幸福をもたらすという強い確信があるのだから、一歩も譲る必要はないと思うのだろう。民主党政権では、ごく些細な事柄でも、連日深夜まで喧々諤々議論し合う光景がよく見られた。その挙句に合意には至らない事も多々あったため、霞が関の役人にとって、民主党政権の評価は散々たるものだ。

自民党政権は、結党以来半世紀以上にわたる合意形成のノウハウがあるため、民主党政権に見られたような空中分解はまず起こらない。そういった意味で、今回のたばこ戦争のような決裂の仕方はごくごく珍しい。

「政治とは、妥協の美徳による可能性の芸術である」

この名言を残したのは、19世紀のドイツの政治家、オットー・フォン・ビスマルクだ。彼は「鉄血宰相」の渾名のとおり、ドイツ統一に向けて軍備増強、富国強兵、対外強攻策を推進した政治家であり、「妥協」という言葉からは一見遠いようにも見える。しかし19の国家と3つの自由都市をひとつの帝国に統一・編入させる大作業は、まさに不可能を可能にしなければならない難業だったのだろう。

多くの政治家が、この言葉をもじった「政治は妥協の産物」というフレーズを、よい意味でも悪い意味でも今なお使い続けているのは、それだけ政治には合意形成の困難が付き纏うものだからだ。

秋に開かれる臨時国会では、厚労省にももう少し「妥協の美徳」を学んでほしい。それは来たる診療報酬・介護報酬の同時改定や薬価制度改革という大難業を乗り越える結束力をもたらすだろう。厚労族と厚労省がいがみ合う愚を、いつまでも続けてはならない。